

- ・牧会者が心の病を患っている場合、その内容と程度にもよるが、服薬して治療を受けて落ち着いていても、教会における人間関係がある程度まで安定した域に達していないと良い牧会は難しいと思われた。
- ・牧師夫妻の両親も牧師であって、引退して同じ教会にいる場合、どうしても親は指導的、干渉的になってしまう。できれば親が別の教会に出席するのが望ましいが、無理な場合は親との関係に距離を持つことが必要である。相談者に対して距離の取り方を極力具体的に実践を試みてもらうよう指導した（相手によっては心理教育的アプローチが必要）。

に来室するクライアントもあり、相談室としての存在意義を感じる（詳しい報告は『総合研究所 Newsletter』Vol.28-1, 2018に掲載予定）。

- (1) 2017年度は、カウンセラー2名体制で運営し、従前通り月曜日限定で開室した。今年度は継続して来室するケースが多かったように思われる。
- (2) 新規ケースについては、来室動機がご本人の意思というよりは、家族や牧師からの勧めや紹介によるものが多く、そのような場合、継続面接としてはつながりにくさを感じた。
- (3) 継続ケースとしては、仕事や学業で燃え尽き、うつ状態（病）となった相談者や、不登校の問題など、すぐには解決できない課題を抱えたケースが多かった。
- (4) 来談者はキリスト教信仰者が多く、クリスチャンのカウンセラーがいる相談室ということで来室したという人も多かった。また、クリスチャンではない人もいたが、キリスト教に親和性がある方が多かった。

#### 教会電話相談

2017年度の相談内容を大別すると、三通りに分けることができる。第一は牧師の家族内の関係と教会での人間関係を巡る諸問題、第二は牧師が様々な理由で教会を辞任した場合のアイデンティティの再構築の困難性、第三は牧師または牧師夫人が心病んでいる場合（心因性であっても）、教会の難しさである。これらの諸問題の背景には教会共同体が魂の救いだけでなく癒しの場として形成されてこなかったのではないかとこの深刻な現実と牧師のパーソナリティの形成上の課題が残されている。受けた相談ケースから検討すべき課題は下記のようなものである。

- ・牧師夫人（相談者）が両親から愛されてこなかった、特に父親は怖い存在であった。このことが神への愛と信頼を分かりにくくさせているという深刻な内容の相談があったが、このことが教会に与える影響は大きい。こうしたケースは継続的な教会カウンセリングを受ける必要がある。
- ・牧師が教会で疲れ、休職・退職した場合、一信徒として生きることが難しく、アイデンティティの再構築に相当時間がかかるように思われた。これには同じ体験をした者が交わりを持つ自助グループのようなものが必要ではないかと考えさせられた。

- (3) 来談者はキリスト教信仰者が多く、クリスチャンのカウンセラーがいる相談室ということで来室したという人も多かった。
- (4) 相談経路は、友人、知人からの紹介が多いが、今年は特に以前来室していた人に勧められてきたという人が多くいた。また牧師からの紹介が増え、少しずつだが教会の中でも認められてきているように感じられる。
- (5) 利用者の居住地は東京都が多かったが、首都圏外から新幹線などを利用して来室する人もいた。

## 教会電話相談

この年は日本人の宣教師夫妻の夫婦関係や子育てを巡る問題や牧師辞任後の精神的不安やアイデンティティに関する問題、また牧師に辞任を要求する役員の人格上の問題など、例年になく相談があり、キリスト教信仰の在り方を問わなくてはならないようなケースに直面し対応に苦慮した。以下は相談ケースから学び、新たに考えさせられたことである。

- ・宣教団体の本部と宣教師の意志の疎通は、両者が離れているため難しくなる可能性があり、誤解が生じやすい。
- ・牧師が辞任や休職をしたような場合、喪失感の回復やアイデンティティの再構築についてフォローやケアが必要となる。
- ・誰が考えても常識を逸し、パーソナリティ障害が疑われるような信徒が役員になって牧師や教会員を悩ませているような場合、教会はどのように対応をすればよいかを相談者のカウンセリングだけでなく、最低限のアドバイスをする必要を感じた。
- ・「教会電話相談」の広告をどのようにすればよいかを考えたい。

2016年度の相談件数は4件であった。

## 2017年度

### グリーンケア・ルーム

2003年11月以来、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センターの業務として続けられている心理相談室「グリーンケア・ルーム」（東京都港区）は、月曜日のみの開室ではあるが、その活動を重ねてきている。また、継続的

問題を拾い出したものである。2015年度の相談件数は7件であった。

- ・牧師の休暇，給与，退職金などについて，牧師から役員会に言いにくい。開拓期から苦労してきた役員や信徒は，牧師の生活の理解に乏しく忍耐を強いるような場合がある。
- ・牧師が自分の子育て・教育の問題を抱えて悩んでいる。
- ・教会員との関係が悪化し，他教会に移られたことで落ち込み，精神的に行き詰まっている。
- ・説教に対する肯定的な応答がないだけでなく，手紙で批評され，手紙を見るだけで心身に症状が出てしまう。そのため抑うつ状態になり精神科・診療内科を受診しているケースは深刻である。

## 2016年度

### グリーンケア・ルーム

心理相談室「グリーンケア・ルーム」（東京都港区）は，2003年11月に聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センターの業務として始まり，月曜日だけの開室ではあるが，地道に活動を重ねてきている。また，数年ぶりに来室するクライアントもあり，この場所で開室を続けることの重要性を感じている（相談者累計：84名／年）。『総合研究所Newsletter』Vol.27-1, p.41, 2017に詳細な報告がある。

- (1) 2016年度は，藤掛明相談室長，以下2名のカウンセラーで運営し，従前通り月曜日限定で開室した。前年度はカウンセラーの減少，またカウンセラーの交代に伴い，相談数は減少傾向であったが，今年は安定して相談者が来室していたように思われる。
- (2) 新規ケースについては，この数年多かった「心の病とその対応」がやや減り，逆に「自分を振り返りたい」「自分の気持ちの整理をしたい」といった内容の相談が多かった。このような場合，相談者の健康度が比較的高いケースが多く，1，2回の面接で終わることが多いというのも特徴的であった。また，様々な場面における対人関係の問題も多く聞かれた。

## IV カウンセリング研究センター (グリーンケア・ルーム, 牧会電話相談)

### 2015年度

#### グリーンケア・ルーム

2003年11月に聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センターの業務として始まった心理相談室「グリーンケア・ルーム」(東京都港区)は、月曜日だけの開室ではあるが、地道に活動を重ねてきている。近年ではインターネットで検索をして訪れる方もあり、キリスト教界のみならず、一般社会の中でも相談室としての認知度を上げているようである(相談者累計:61名/年)。『総合研究所Newsletter』Vol.26-1, p.5, 2016に詳細な報告がある。

- (1) 2015年度は、窪寺俊之カウンセリング研究センター長を相談室長とし、藤掛明相談室長代行のもとに、従前通り月曜日限定の、カウンセラー2名体制で運営した。そのほかに1名のカウンセラーが非常時の対応やカウンセラーに対するスーパーバイザー的役割を担った。カウンセラーの減少に伴い、2015年度の相談数はやや減少傾向にあった。
- (2) 新規ケースについては、うつ病や適応障害といった診断を受けたもののそれにどう対応すればよいのかといった内容が多く、継続ケースでは家族の問題(特に子どもの問題)が圧倒的に多いように思われる。
- (3) 相談経路は、知人からの紹介が多く、利用者の居住地はほぼ東京都の人であった。

#### 牧会電話相談

相談件数は多くはなかったが、いずれも相談内容が深刻であった。中には牧師を休職された方があった。牧師が牧会できなくなるというほどの悩みは、単に牧師の個人の性格や力量の問題ではなく日本のある種の教会の体質が改善されないと解決が難しいという印象を受けた。以下は相談者全体の中で出てきた